【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	大分県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	杵築市立杵築中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	４	４	４	１	１３	２８
生徒数	１３９	１３３	１２７	２	４０１	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

一人ひとりが主人公となる授業づくり
～基礎・基本の定着を図る指導法の改善と評価の工夫～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

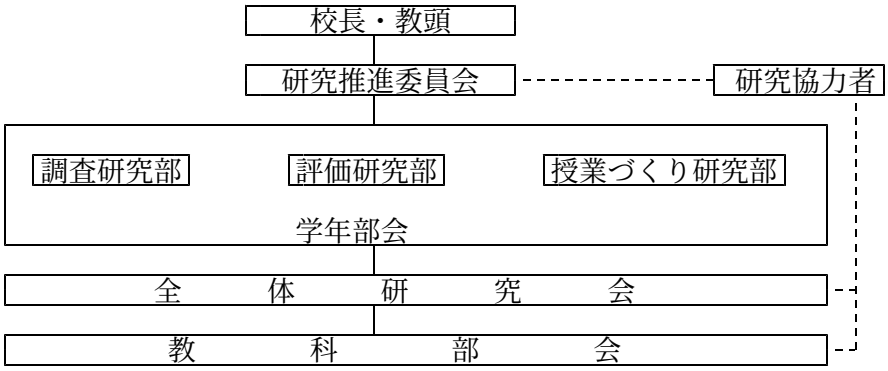
○全学年・数学／英語
①生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため
②平成１３年度より，少人数指導を実施し，当該教科に関する研究実績があるため

(2)　年次ごとの計画

平成15年度	○　テーマ 「一人ひとりが主人公となる授業づくり ～基礎・基本の定着を図る指導法の改善と評価の工夫～　」 ○　研究の見通し ①研究仮説 生徒の実態を把握し，実態に即して単元を見通した授業設計に取り組めば，生徒一人ひとりが主体的に学ぶ場が生まれ，確かな学力が身につくであろう。 ②仮説のとらえ方 生徒の実態把握とは，抽象的な判断でなく，より授業に生きるような数的なとらえを意味する。 単元を見通した授業設計とは，導入・展開・まとめの学習過程を踏まえ，授業の成果についての評価を組み入れたものにする。 主体的に学ぶ場とは，研究主題にある「主人公」になった状態と考える。 ○　研究の内容・方法 生徒の実態調査と分析をもとに，「確かな学力」向上のための教材開発，評価を組み入れた授業づくりを進めるとともに， ①各人の授業技術の向上を目指す ⅰ．生徒一人ひとりが「主人公」となる場面，生徒が主体的に学ぶ場を組み入れることを目標に授業をすすめる。 ⅱ．指導法の工夫・改善を行い，基礎学力向上のための手だて（少人数指導・習熟度別学習・ＴＴなど）を組み入れ，有効かどうか評価していく。 ⅲ．よりよい評価方法，補助簿の開発に努める。 ②教育活動全体のなかで学力向上を目指す ⅰ．課題解決学習の導入等，授業過程の見直し ⅱ．少人数指導での指導法・教材の開発 ⅲ．朝自習のやり方の見直し ⅳ．教育課程全体の見直し 上記の①②を重点的に研究を進めていく。

平成16年度	○　テーマ 平成15年度に同じ ○　研究の見通し 平成15年度に同じ ○　研究の内容・方法 ①各人の授業技術の向上を目指す ⅰ．生徒一人ひとりが「主人公」となる場面，生徒が主体的に学ぶ場を組み入れることを目標に授業をすすめる。 ⅱ．授業のなかに基礎学力向上のための手だて（少人数指導・習熟度別学習・ＴＴなど）を組み入れ，有効かどうか評価していく。 ⅲ．よりよい評価方法，補助簿の開発に努める。 ②教育活動全体のなかで学力向上を目指す ⅰ．課題解決学習の導入等，授業過程の見直し ⅱ．少人数指導での指導法・教材の開発とその有効性の確かめ ⅲ．ドリル学習の時間の設定とその有効な方法の開発 ⅳ．教育活動全体の見直しと組織化

(3)　研究推進体制



※　大分大学教育福祉科学部の先生に研究協力者として，研究全般にわたって指導を受けている。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

○　本校の「学力」について，全員の意見を集約した。「読み・書き・計算」のすべての学力のベースになるものから，「生きる力」まで，学力を層的にとらえていくことを確認した。

○　６月に平成13年度実施の国立教育政策研究所作成の学力検査問題を全学年，国・社・数・理・英の５教科で実施し，現時点での生徒の実態把握ができた。またそれを今後授業の中にどのように取り組めば良いかを、教科部会などで論議してきた。

○　年４回の授業研究会を実施した。各会とも提案授業者のみでなく，６人から８人が授業を公開し，個人の授業技術の向上に努めた。シチュエーションを与えて学ばせた英語，メールでモラルを含めて学ばせた技術，ディベートに取り組んだ国語等，生徒が「主体的に動く場」を組み入れた授業に取り組んだ。

○　数学科の少人数指導においては，問題解決学習の授業が提案された。文化祭での「折り鶴でつくったアトム像」を導入に，紙の量をどうはかるか，という課題から「比例と反比例」をとらえさせるものであった。生徒の意欲・関心も高く，問題解決に熱心に取り組んでいた。

○　上記の授業のように，全教科で「問題解決的な学習」に取り組んだ。どの教科も生徒が「主体的に動く場」（＝主人公になった状態）を，授業のなかに組み込むことで，教師が変わり授業が変われば，生徒が変わることになる。教師の学びの論理で授業を進めるのではなく，子どもの学びの論理に沿った授業のあり方について深く討議し，共通のものとなっていった。また問題解決的な学

習とドリル学習に分けて考え，単元を視野に入れた授業構成のあり方について理解が進んだ。

２．今後の課題

○　本年度も４回の授業研究会で授業技術の向上を図ったが，次年度，さらに授業技術の向上を目指すとともに，子どもの学びの論理に沿った授業のあり方について研究を進めてく必要がある。
○　ドリル学習の時間を授業の中で組み込むだけでなく，教育課程のなかに位置づけていく。
○　生徒の学力実態の把握だけでなく，生活実態を把握することに努め，学級づくり，授業づくりに生かしていく必要がある。
○　少人数指導におけるよりよい指導のあり方をさらに探っていく必要がある。
○　的確な評価を行うため，自己評価のしかたや他己評価のあり方を授業実践の中で研究していく必要がある。
○　次年度も学力検査を実施するなど継続的な調査を行い，基礎・基本の定着状況についての確かめをしたい。。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

○　平成 15 年度より，本市では中学２学年に国・数・英の３教科でＣＲＴの実施を開始した。（５月）
○　平成 15 年度より，本県では中学２学年に国・数・英の３教科でＮＲＴの実施を開始した。（10 月）
それぞれ，生徒の学力実態を的確に把握するために行われている。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

○　研究発表会を平成 16 年 10 月 20 日に予定している。
○　他校への情報発信の一つとして，本校のＨＰに研究成果を載せる予定にしている。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑ １５年度からの新規校　□ １４年度からの継続校

【学校規模】　□ ３学級以下　□ ４～６学級
□ ７～９学級　□ １０～１２学級
☑ １３～１５学級　□ １６学級以上

【指導体制】　☑ 少人数指導　☑ Ｔ．Ｔによる指導
□ その他

【研究教科】　□ 国語　□ 社会　☑ 数学　□ 理科
☑ 外国語　□ 音楽　□ 美術　□ 技術・家庭
□ 保健体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑ 有　□ 無